

自販機への補充作業で守るべき安全

足立区に本社をおき、日々58名の従業員が都内全域にトラックを走らせて自動販売機への飲料補充を行っている。中型や準中型など運転免許の条件がある中での人手の確保と安全には頭を悩ませているという。

取材・執筆 吉岡耀子(交通ジャーナリスト)

飲料補充はトラックで、 運転免許は中型か準中型

社の業務は1948年に菓子製造業から始まった。日本橋から上野アメ横、浅草へと移転しながら発展し、1963年に冷菓事業部を設立、2001年に足立区に本社を新築、社名をレイカと改めて今日に至る。事業の中心は自動販売機による清涼飲料水の販売で、自動販売機は足立区や他区の公共施設、東京都の清掃工場、警察署、機動隊、消防署、都立高校、病院といった公的な場をはじめとして、オフィス、工場、倉庫、商店、一般住宅などに幅広く設置している。

自動販売機への補充業務には従業員58名(アルバイト含む)が当たり、トラック32台を使用している。この他に営業車として普通車と軽自動車合わせて5台(内2台が電気自動車)、工場からの荷下ろしなどを行う。

飲料補充はトラックで、運転免許は中型か準中型

フォークリフトが2台あり、合計39台が社有車として活躍している。

トラックを運転するには中型免許か準中型免許が必要なので、人材の確保が難しいのが、この業界全体の問題だという。「最近免許を取る若者が少なくなってきたるので、こうした特殊な条件ではなおさら」と安全運転管理者を務める、自販機営業部の池田英司さん。

今後の課題としては、普通免許で入社してから会社のサポートで中型免許を取得してもらいたいという。



▲社屋と駐車場



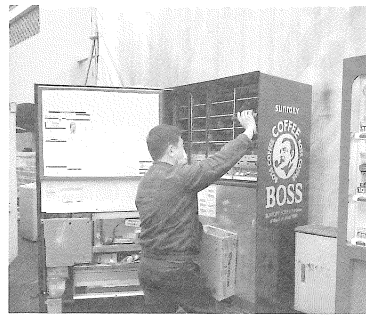
▲トラックとフォークリフト

いずれにしても、入社後1か月から1か月半ほどは先輩の車に同乗して手順やルートをはじめ安全運転の実際を学びながら業務に慣れていく。とくに苦手や不安なことがあれば敷地内で練習する。

自動販売機への入れ替え時、 作業に伴う危険と注意

自動販売機の入替え作業は道路上で行うので、安全のための注意が欠かせない。トラックでの補充はほぼ毎日決まったルートを取り、自販機業界ではこれをルート配送と呼ぶ。大半はルートごとにドライバーとトラックが決まっているので、慣れた作業ではあるが、それでも起こりがちなトラブルに注意が欠かせない。

ルート配送は2.95トンまたは2トンのトラックで行い、車体は全てセミロング車だ。



▲自販機補充



▲場所により二人ひと組での作業

セミロングトラックでは狭い道路でガードレールにぎりぎり近づけて止めるので、発進時にうっかりハンドルを切ると後部をこすったりする。次の自販機へと気持ち急いで「ゆっくり、慎重に、まっすぐに」という注意を忘れがちになるのだろうか。朝礼でもこれは繰り返し伝えている。また、駐車時にはミラーを畳むことは、通行の迷惑にならないため、もらい事故を防ぐために必ず行うと決めている。

それでも交通が激しい場での作業は困難なので、ルートを工夫してなるべく交通量の少ない時間帯に回るようにしている。とくに危険な箇所では二人ひと組で一人(主にシニア従業員)が黄色いベストを着て作業中の交通事故への警戒を行う。

また、月に1、2回は全体朝礼で安全スローガンを全員で斉唱する。スローガンは何年か前に社員から募集し、12句を12か月分として選び、以後毎年くり返し使う。

例…(1月) 事故ゼロに必ず出来る全員で
(5月) 帰り道急ぐ気持ちにブレーキを

地域の交通安全と防犯に協力。 労働環境の高評価もうれしい

社員への交通安全啓発には警察署の協力

も大切だ。年に1、2回、千住警察署の交通課の講話を聞く。この日は全社員が仕事を早く終えて午後3時頃に集まり、管内で起きた交通事故の状況説明、映像、そのほかの事故事例と危険回避などの講習を受ける。コロナ禍で中断していたが再開を期待している。

一方、社は千住交通安全協会、千住ビル防犯協会の会員として商店街の祭りなどにも協力して地域貢献を目指している。警察署や保険会社、地域とのつながりは会社にも社員にも安全意識をもたらすと考えている。

また業務については、社員は月に1回は必ず有給を取るよう定めてゆとりを持たせるように努めている。労働環境の評価では足立区ワークライフバランスの三つ星を獲得しているのも誇りだ。

池田さんは「運送業界の人材不足には常に頭を悩ませています。また安全への抱負としてブレーキアシストや左折時センサーなどの安全装備搭載車を徐々に増やすことも大事」と希望を述べた。



▲田口社長(右)と安全運転管理者の池田さん(左)